外国人の人権問題と私たちにできること

2020年の東京オリンピック・パラリンピック、2025年の大阪万国博覧会を控えた日本。これからますます、多くの外国人が訪れることでしょう。

近年は観光客だけでなく、身近な場所で彼らの姿を見かけるようになりました。飲食店やコンビニ、工場、医療現場などで働く人も多くいます。

世界の距離が縮まり、多様な人々がともに暮らすようになることは素晴らしいことです。しかし異なる文化や言葉を持つ人と共生するためには、多くの課題を解決しなければなりません。

・言葉が通じない外国人をコミュニティに入れない
・外国人であることを理由にアパートやマンションへの入居を拒否する
・外国人を排斥する言動（ヘイトスピーチ）

これらの問題は、私たち日本人がお互いを「同質性を持つ存在である」と思い込んでいることに起因します。しかし、「日本人なら」「外国人だから」というのは、よく考えてみると成り立ちません。日本人にもさまざまな人がいて、外国人もそれは同じだと言うことが分かるからです。

どんな言葉を話していても、どんな文化や宗教を持っていても、その人がその人らしく生きることは誰もが持つ権利です。

「郷に入っては郷に従え」と言うことわざがあります。これを日本に住む外国人にそのまま適用し、言動を強いるようなことがあってはいけません。

異なる文化を持つ人がいることを理解し、多様性を認めることが重要です。

「そんなことを言っても、ゴミ出しのルールは守らないし、交通ルールも理解していないじゃないか」という声があるかもしれません。しかしこれらの行動は、「ルール違反をしよう」と思って引き起こしたのではなく、ただ「ルールを知らない」から引き起こされた可能性があります。

さらに踏み込んで考えると、それらのルールは多言語で伝えられているでしょうか。あるいは言葉が分からなくても、目で見て分かるような工夫はされているでしょうか。

本当に困っている人は自分たちではなく、外国人かも知れません。

もし地域で困っている外国人がいたら、積極的に声をかけましょう。時には注意することも必要です。

普段は違う言葉で会話している人も、「ゆっくり、はっきりとした日本語」ならば、内容の多くは理解することができます。

まずはあいさつをしてみましょう。あいさつができる関係になれば、ともに気持ちよく生活することができるようになります。

「外国人に対する偏見や思い込み」と、「国によって違うマナーやモラル」の違いは分けて考える必要があります。

■外国人に対する偏見や思い込み（例）
・悪いことをしそう
・話しかけても通じない
・なんだか怖い
・手で食べるから汚い

■国によって違うマナーやモラル（例）
・日本では電車で電話をしてはいけない（するとしても小声）が、A国では小声で話すと「悪いことを考えている」と思われるので、わざと大きな声で話す

前者はその存在を私たちが自覚し、克服する必要があります。後者は私たちが相手のことをよく知り、その上で必要に応じて「日本ではこうした方がいいよ」と教えてあげましょう。そのときは「あなたの国のことを教えてほしい」と一言を添えると、きっと喜んで話してくれるはずです。

「自分が外国人だったら」という視点で、周りを見渡してみてください。医療、学校教育、地域社会参加など、本当にすべての人に開かれていますか？　言語や文化、制度の壁で取り残されている人はいませんか？

外国から日本に来た人が「日本っていい国だな」と思えるかどうかは、私たちの言動にかかっています。

問 教育委員会事務局
人権・同和教育係
☎0943・32・0093

新しく町指定文化財になった『高良玉垂宮縁起』【その1】

（前略）仁徳天皇五十五年（西暦367年）藤大臣帝都ヲ辞シテ、筑後ノ国御井郡高良山ニ移リ、高牟禮ノ山上ニ宿ス。四方八葉ノ石疊ヲ構テ結界ノ地ト為シ、居ヲ彼ノ中央ニトス。薨御ノ後、山上ニ社ヲ建テテ玉垂宮ト号シ、高良ノ大明神ト崇メ奉ル（後略）。

右は今回ご紹介する『高良玉垂宮縁起』（書籍）の一節です。平成30年8月1日付で、広川町の有形文化財に指定されました。

この縁起は幅30・4センチメートル×長さ715センチメートルの巻子本（巻物）。以前は故稲員文蔵氏（熊本市）が所蔵していましたが、現在は稲員信幸氏（太田区）が所蔵しています。平成25年の解読や校訂、活字化の過程で、極めて貴重なものであることが分かりました。

久留米市の高良大社には、数種類の「玉垂宮縁起」が伝わっていますが、稲員家所蔵本はそのいずれとも一致せず、記述内容はわずかに違いがあります。

巻末の奥付には、筆写年月日の記載はないものの、「高良社大祝鏡山保清謹写之」とあります。

文久元年（1861年）、物部定儀（鏡山氏）によって記された『鏡山氏（高良社大祝職）系譜』によると、大祝保清は高良社大祝職鏡山保常の次男であることが分かります。保清は天正10年（1582年）、辺春城（八女市立花町高須田）に援軍として駆けつけ、討ち死にしています。

保常には保真、保清の2人の息子がいます。兄の保真は父親の軍功により、豊後の大友氏から感状と所領の加増を受けたことが、古文書などで明らかになっています。弟の保清に関しては、これまでほとんど詳細が分かっていませんでした。

しかし今回、新しい「縁起」を確認したことで、保清も同時代に大祝職として高良社中枢で活動していたことが明らかになりました。

これらから、奥付に年月日の記載はないものの、筆写された年代は戦国時代末ではないかと推測しています。

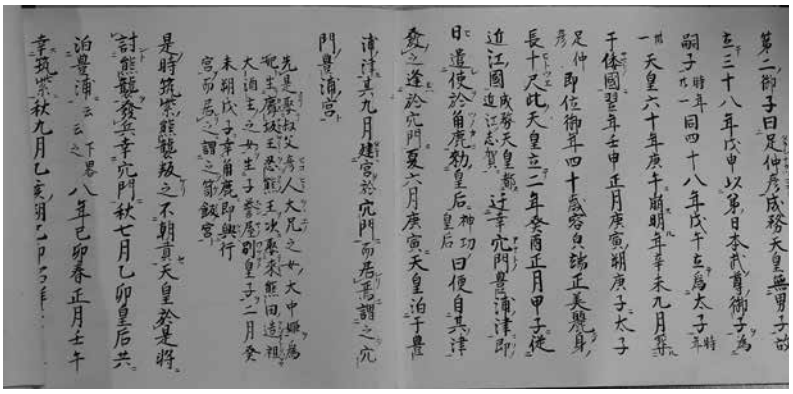
保清が筆写したという「縁起」の原本は、本来ならば高良大社に伝わっていてしかるべきですが、今のところ確認できていません。

そもそもこの「縁起」は、なぜ稲員家に伝わっているのでしょうか。

古来高良社では、鏡山・宗崎・稲員・神代・丹波氏を「高良神裔五氏」と称していました。中でも稲員氏は、神管頭職として三種の神宝出納職を兼ね、大役を任されていました（ちなみに辺春城の戦には、鏡山保常との義によって稲員安茂も出陣し、討ち死にしています）。

このような背景から、稲員家に伝わっているのではないかとも考えています。

広川町郷土史研究会



昨年8月1日付で広川町の有形文化財に指定された『高良玉垂宮縁起』

広川町古墳資料館だより

直弧文彫刻体験ワークショップで、石人山古墳の石棺を復元しています。その材料である阿蘇溶結凝灰岩原石の入手は困難を極めました。

石棺の棺蓋は高さ50センチメートル×幅150センチメートル×長さ270センチメートル。これが1つの大きな石からできています。棺身も4つの大きな石の組み合わせによるもので、石棺を復元するには、これより大きい石材が必要です。

しかし現在、この大きさの石材を採取するには、何年もの歳月を要します。石材内部にひびがあると彫刻時に割れてしまうこともあり、実際には実物の3倍の大きさが必要です。

そこで棺蓋・棺身は、数個の石材の組み合わせで再現することになりました。